令和２（２０２０）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No. 26（R2. 11. 20発行）文責 校長 福田雅也

違いを認める

「八百万の神」…もちろん、神道における神々のことをこう呼びます。日本では、古来より、自然界のあらゆるものに神が宿っているとされてきました。 山や川、海、木、 湖 、風、雪、雨、太陽、月、星など、色々なものに神がいると考えられてきたのです。そのことは、それぞれの地域に残る風 習や祭り等にしっかりと受け継がれていっております。そして、神社にはその神社がまつるご神体がそれぞれに存在しているのです。

さらに、日本人は「神道」とは別の「仏 教」も受け入れ、インド発 祥のこの宗　教は、日本の宗　教として発展していきました。その結果、現在の 私 達の生活は、お正 月は「初 詣」や「三社参り」に行きますが、お葬式は、お寺にお世話になり仏式で行 うという文化で成り立っています。（もちろん、すべての人がそうではありませんが…）歴史的に神仏習 合の文化が形成されてきたのです。

加えて、戦国時代以降に入ってきたキリスト教も、禁 教等の歴史はあったものの今では当然のように受け入れられています。

世界に目を転じてみると「宗　教の対立」に起因する 諍 いが発生しています。もちろん「宗　教の対立」という一 言で説明できないことは十 分に理解できます。しかし、これらの事実の中では、宗　教を含め「違いを認めることができない」ことが根底にあるのではないかと思えてなりません。

私 は、前 述のような日本の文化の中では、「宗　教の対立」は起こりにくい状　況ではないかと考えます。多神教文化で生きてきた 私 達日本人は、他の宗　教の「神」をも、「違い」も含めて受け入れることができると考えているからです。「良いか」「悪いか」は別として、結果として、日本が歩んできた歴史・文化の中で、私 達はそのように感じるということなのです。幸いにも「宗　教」の面では、日本人は「違いを認める」ことができる存在だと思うのです。

とにかく、言えることは「違いを認める」ことの大切さです。私 達の生活の中で考えれば、様々な面で「違いを認めない」ことが様々な「差別」につながる、ということは十 分に考えられます。ですから、子どもたちには、大切な人権感覚の一つとして「違いを認める」ことが自然にできる人になってほしいと願っているのです。

先日ある研 修 会で「性の多様性について認め合う　～教 育現場における性的マイノリティの人権～」という講話を聞く機会がありました。その内容について詳しく触れるには紙面が足りませんが、私たちが知っておきたい重 要な情 報として、「日本における性的マイノリティの割合は８．９％」（2018年10月に電通ダイバーシティ・ラボが約６万人を対 象に行ったインターネット調査）という数値がありました。本校の学 級の人数で考えるとクラスに１～２人は存在するという数字です。このことをしっかりと頭 の中に置きながら教 育活動を進めていかなければならないと強く感じました。そして講話の中で繰り返し話されたことは「多様性を認めること」「自分との違い、少数派の違いを認めること」でした。冒頭の 話 と重ねて考えると、このことは決して「性的マイノリティ」だけに当てはまるのではなく、すべての物事に共 通するのではないかと思います。

本校では、11月30日から12月11日の期間を人権旬 間と定め、各 学 級で人権学 習に取り組んでいきます。人権学 習の目 標の中で各学年に共 通する言葉は「互いに認め合う」という言葉です。この言葉は「違いを認める」につながる、あるいは共 通するものだと感じます。今回の学 習を進める中で、本校の子供たちに「違いを認める」という大切な人権感覚が育まれることを願っています。